

## 宮脇綾子《はりえ日記》について①

—第1巻から第3巻まで—

西崎紀衣

豊田市美術館は創作アブリケ作家・宮脇綾子(1905-1995年)の作品を192件所蔵している。その大半は単体のアブリケ作品であるが、《木綿縞乾柿型集》(1967-89年、15冊)や《縞魚型文様集》(1967-82年、22冊)のように、複数年に渡って様々なアブリケが貼られた折本からなる作品も含まれている。本稿で挙げる《はりえ日記》もまた同様の体裁の作品である。

額装や屏風、衝立のアブリケ作品の場合、展示または印刷物における一瞥によってその様相を認識することは可能である。しかし表出が部分的にならざるをえない折本の場合、その全体像を一目で完全に把握することは不可能である。作家のライフワークともいえる重要な作品であるにもかかわらず、折本70冊からなる《はりえ日記》もその膨大さゆえに、部分的な紹介に留まっている。また過去、作家の生前より幾度か日記の抜粋が書籍化<sup>1</sup>されたこともあるが、作品の全体が紹介されたことは未だない。

本稿では《はりえ日記》の第1巻から第3巻までの記載内容を起こし、各該当頁の画像と併せて掲載した。作品の詳細だけではなく作家宮脇綾子の内面を知り、他のアブリケ作品に対する更なる理解を深める一助となると確信している。

作者・宮脇綾子略歴

1905(明治38)年2月8日、東京に生まれる。旧姓門脇綾子。1927(昭和2)年に名古屋市在住の洋画家・宮脇晴(1902-1985年)と結婚、1女2男に恵まれ、主婦として宮脇家を守り続けた。戦争を生き抜き新しい時代を家族と迎えた1945(昭和20)年8月、綾子は夫・晴の了解を得て<sup>2</sup>、身の回りにある古布や端切れを用いた創作アブリケを開始する。作品の主題として、庭の花や草木、魚、野菜など、身近な事物に着目、「布と遊ぶ」の言葉そのままに素材の特性を活かした、素朴ながらも斬新な作品を制作した。1952(昭和27)年11月、初個展を開催。以降、最晩年に至るまで国内外で作品を発表し続けた。1960(昭和35)年12月には「アブリケ 綾の会」を主宰、以降「綾の会展」を毎年開催。また短期大学や文化センター等でも講師を歴任、多くの後進や愛好者を育てた。1995(平成7)年7月7日、90歳で歿。

《はりえ日記》について

1972(昭和47)年2月18日から1990(平成2)年5月7日まで続けられた絵日記。各巻30.2×21.0cm、概ね45頁前後の折本である。各表紙には〈貼り画帖〉〈はりえ帖〉〈貼り画と水彩帖〉〈はりえ日記〉など様々なタイトルが付けられているが、これらすべてを総称して《はりえ日記》とされる。アブリケの素材は布や紙が中心だが、革や藁、

本物の紅葉や蔓など、通常の作品と同様に、作家の機微に触れた素材も用いられている。また「はりえ」としてはいるが、水彩やペン、色鉛筆による描画も随所にみられる。

「毎日は、とてもやれなだらうけれど、つとめて貼って見よう。<sup>3</sup>」と始めた日記には、見開き2頁で1日の紙面構成が多いもの特に規定はなく、1日で1頁の場合や、1日に複数頁を費やすこともある自由な構成となっている。旅行などで当日のうちに日記を残せず、後日まとめ書きすることもあれば、展覧会準備等で多忙な時期はしばし中断することもある。

アプリケや描画の対象(綾子曰く、モデル)については直接的、間接的に紙面に記されることが多いが、時に記述内容と無関係に見えるアプリケが貼られる場合(例:第2巻30-31頁 図37)もある。アプリケや描画の対象の名前のみ『』つきで付記される頁がある一方、自らの作品の行く末に対する熱い想い(第2巻22-23頁 図33)や、「香万個乾柿型完成」の喜び(第2巻40-41頁 図42)など作家の気持ちが溢れて余白にまで綴られた頁など、日記らしい自在さを感じられる。また巻にもよるが、戸棚や長持ちなど身の回りを整理した折、偶然再会した過去の小品を貼り付けている(例:第1巻34-35頁 図17や第3巻32-33頁 図60)ことも興味深い。なお過去のアプリケ作品を日記に貼る場合は、「古い作品」を貼った旨をその都度当該頁に記している。

日記の内容を目にするほど、日頃より敬愛する夫・晴の言う「観察の大切さ」の教えに沿うがごとく、綾子は目にした四季折々の草花や野菜、魚、また岐阜県中津川市に所有する宮脇家の別宅の豊かな自然など、私たちが見落としがちな発見や出会いを瑞々しい感性で捉え、巧みに切り取っていることがわかる。また晴や子供たち、知人友人等との心温まる交流や忘備的な記録だけではなく、制作に対する作家の真摯な姿勢をしばしば知ることができるのも日記の醍醐味といえよう。

#### 博物館実習について

豊田市美術館では、2017年度の博物館実習の一環として《はりえ日記》の第1巻から第6巻までを文字に起こす作業を行った。6名の実習生<sup>4</sup>がそれぞれ1巻ずつ担当し、作家と作品および取り扱い方を事前の授業で学んだうえで、筆者を含む学芸員立会いのもと、作業にあたった。記載がくずし字であること、文中に学生が日ごる接することのない旧仮名遣いや旧字体、異字体が散見されることなどにより、1冊全てを起こし終えることは目標とせず、定められた時間内で行いうる範囲とした。学生たちにとってそれ自体が作品でもある日記を解読し文字に起こす作業は、直に作品と対峙し作家の内面に触れる貴重な経験になった。本稿掲載の日記各巻は学生が文字に起こした資料を校正し必要に応じて訂正を加え、また学生が着手にいたらなかった後半の頁については筆者が作業を行った。筆者による作業終了後、さらに作家ご

遺族の宮脇実保子氏、嶋地由美氏、嶋地奈美氏に第1巻から第3巻の内容を確認いただいた。日記の中にも登場する3氏は、晩年の綾子の身近にあってその日常や創作活動をしばしば目にしている。ご遺族との連絡および内容確認、補足説明の聞き取り、記載の過誤の修正等は成瀬美幸が行った。

2017年度の博物館実習で対象になった日記は、下記の通りである。

はりえ日記 1巻：1972(昭和47)年2月19日－5月3日、45頁

はりえ日記 2巻：1972(昭和47)年5月13日－12月14日、45頁

はりえ日記 3巻：1972(昭和47)年12月22日－1973(昭和48)年6月14日、45頁

はりえ日記 4巻：1973(昭和48)年7月13日－9月4日、45頁

はりえ日記 5巻：1973(昭和48)年9月5日－10月20日、43頁

はりえ日記 6巻：1973(昭和48)年10月20日－12月2日、43頁

本稿で掲載する日記は第1巻から第3巻。第4巻から第6巻は次号紀要に掲載し、以降についても継続する予定である。

この度本稿制作にあたり、宮脇実保子氏、嶋地由美氏、嶋地奈美氏には多大なるご厚情を賜りました。ここにあらためて心よりお礼申し上げます。

#### 註

1：『宮脇綾子はりえ日記一』(京都書院、1979年)、『宮脇綾子はりえ日記二』(京都書院、1984年)、『宮脇綾子はりえ日記』(1～3)(東方出版、1997年)

2：嶋地千穂子「母と過ごした日々」『生誕100周年記念 アプリケ作家 宮脇綾子の世界』展カタログ、NHK きんきメディアプラン、2004年、178-179頁

3：「毎夕食後ずつと日記『にちにちのこと』／に貼り画をして居たが、日記には『画』を／描くことにし これからは、ここに貼る事にする／毎日は、とてもやれないだらうけれど／つとめて貼って見よう。／楽しみ帖かべんきょう帖か………」《はりえ日記》第1巻(1972年)、中表紙

4：2017年度豊田市美術館博物館実習生：井関千絵、岡本亜季、谷崎壮太郎、長坂有紗、長田詩織、山際妙子(五十音順)

#### 凡例

- ・本文中の旧仮名遣い、旧字体、異字体、踊り字は原則として原文のままとした。
- ・本文中のカッコ等の記号は、原則として原文のままとした。
- ・行間に付記されている挿入文はすべて〈〉で本文中に表記し、文字サイズを統一した。
- ・レイアウト上の細かな改行は1行にまとめた。
- ・文章末の日付やサインは、行の下揃えとした。
- ・人名については註釈で解説しているが、一部調査が行き届かなかったものがある。

第一卷

中表紙

貼り画帳 (一)

思いつくままに、

毎夕食後すつと日記『にちにちのこと』  
に貼り画をして居たが、日記には『画』を  
掛くことにし これからは、ここに貼る事にする  
毎日は、とてもやれないだらうけれど  
つとめて貼つて見よう。  
楽しみ帖がべんきよう帖が……

四七年二月十八日よりはじめ

一卷 二-三頁 (図一)

またこの様に延びた  
つくしはないけれど  
毎年作るつくしを思い出しながら  
布と遊ぶ

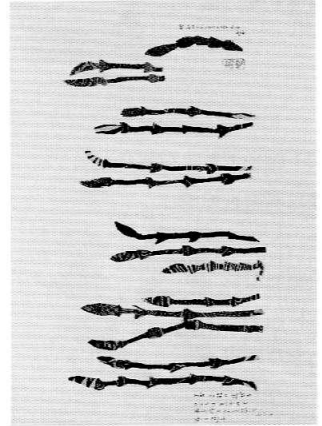
一卷 四-五頁 (図二)

庭の隅に芽を出した  
サフランを抜いて  
昨年十一月に  
中津川の山の家で  
根のところを残して  
持って帰って置いたら  
この様な形に〈新しい〉芽を出した

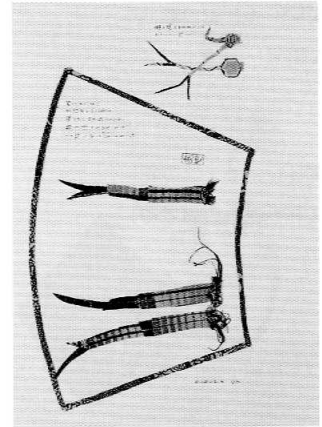
昭和四十七年二月十九日 写

二月二十日 写

図一 一卷 二-三頁



図二 一卷 四-五頁

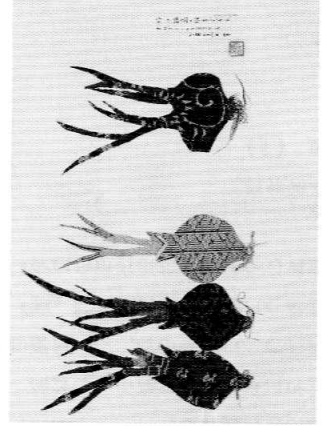


一巻 六・七頁 (図3)

昨年輪島の朝市で「モデルにと照って」買った  
玉ねぎがこんな芽を出した

二月二十一日 写

図3 一巻 六・七頁



一巻 八・九頁 (図4)

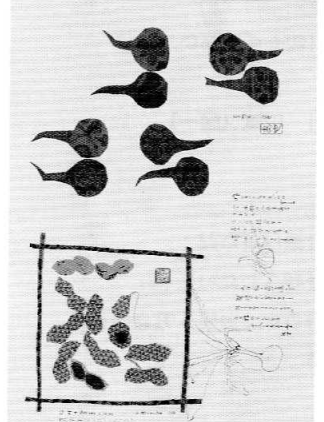
去年の三十日にモデルに買った  
今 水鉢に入れてある  
くわいは  
ここから根が出て  
茎が伸びて葉が  
澤山にしげって来る

これは私の思い違いで  
鷺津さんが芽を出たのを  
持って来て下さったら芽は  
この様に生えて居る

何時も食卓にでる  
落花生 (十ヶ位づつ食べる)

二十四日 写

図4 一巻 八・九頁



四十八年六月二十五日記す

二月二十三日 写

一巻 一〇 - 一一頁 (図5)

ずっと前から  
家にあるモデル  
たしか十年前頃  
波切の海岸<sup>4</sup>で  
漁師から買ったもの  
『海すずめ』

三月三日 写

図5 一巻 一〇 - 一一頁

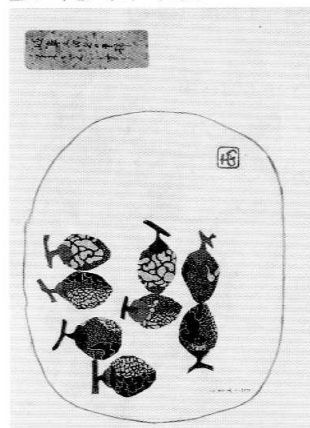


一巻 一二 - 一三頁 (図6)

岐阜久田見<sup>5</sup>の干柿  
畠禾ちゃん<sup>6</sup>から買った

三月五日 写

図6 一巻 一二 - 一三頁

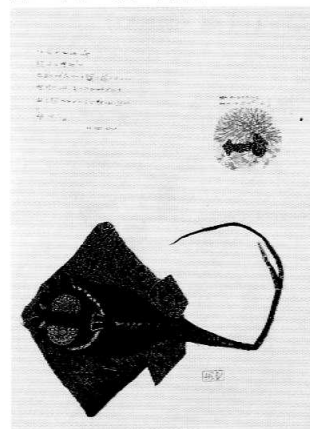


一巻 一四 - 一五頁 (図7)

これも十年前  
波切の海岸で  
伊勢えび<sup>7</sup>の網に掛ったのを  
漁師から買って来たもの  
長い間よくモデルに使って居る  
『赤えい』

三月六日

図7 一巻 一四 - 一五頁



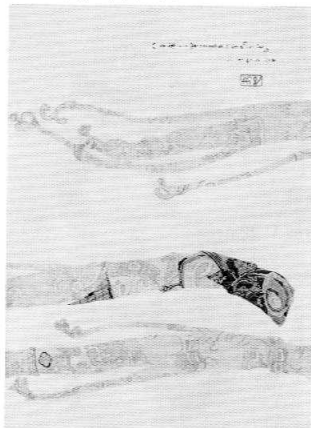
蒸しの中に  
まじって居た『いか』

一巻 一六・一七頁 (図8)

八百屋から買ってきた一本の『ごま』

三月七日 写

図8 一巻 一六・一七

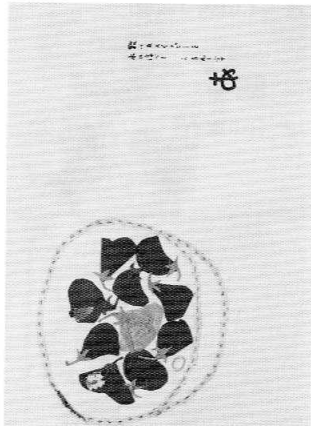


一巻 一八・一九頁 (図9)

散ったスイトピーを  
水に浮かべて

三月九日 写

図9 一巻 一八・一九頁

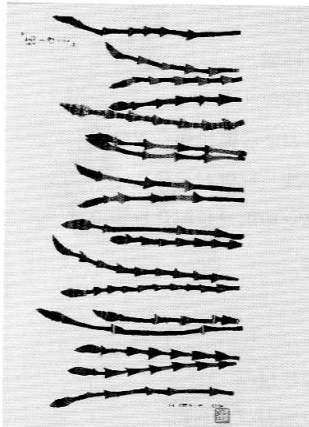


一巻 二〇・二二頁 (図10)

『綿を使つて』

三月十日 写

図10 一巻 二〇・二二頁

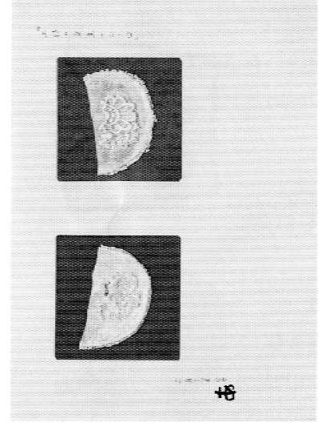


一巻 二二―二三頁 (図一―一)

『土佐の文目の切り口』

三月十一日 写

図一―一 一巻 二二―二三頁

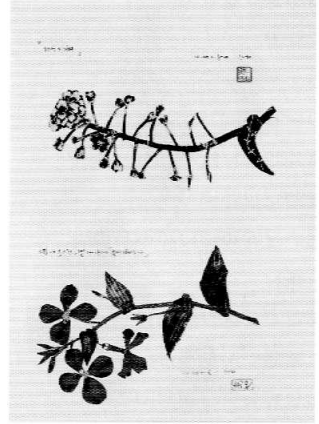


一巻 二四―二五頁 (図一―二)

『菜の花』

三月十七日 写

図一―二 一巻 二四―二五頁



庭にいっぱい咲いて居る『紫花菜』

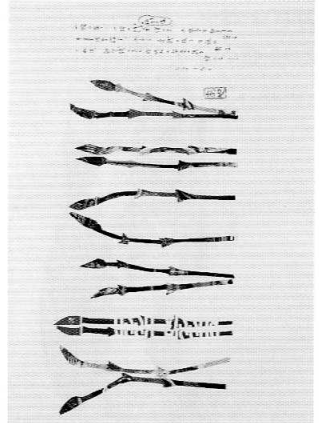
三月十四日 写

一巻 二六―二七頁 (図一―三)

一枚の布、一枚の紙く(の柄をその儘)を使って、土筆を切ることを覚え  
手当たり次第作る。今日も色紙二枚を日記に貼る  
これは、新聞紙の中の折込みの広告の紙を使って―

三月十九日

図一―三 一巻 二六―二七頁



一巻 二八 - 二九頁 (図14)

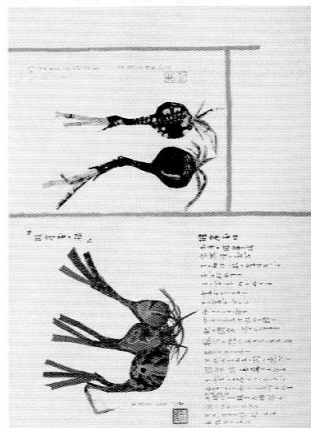
昨日のまんじゆしやげを  
ほくして見る

『彼岸花の根』

彼岸花は  
九月の彼岸頃  
突然咲く花だ  
その時は一枚の葉もないが  
花が枯れると  
その下からぬくぬくと  
葉が出てくる  
その葉が今でも  
みどりして居る  
やがて葉は枯れて終う  
秋の彼岸近くになると  
狐火のようにあちらこちらから  
芽が出て来て  
それがまたたく間に延びて  
彼岸頃 眞盛りとなる  
それでこの名がついたことが  
毎年見て居てうなづかれる  
〈十五年前〉五株ばかり植えた球根が  
庭にはひこつて居る  
その一もとを掘り起したら  
百位出て来た

三月二十四日 写

図14 一巻 二八 - 二九頁



三月十三日 写

一巻 三〇頁 (図15右)

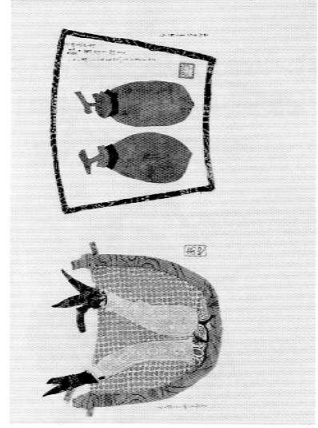
北海道産

鮭の裏皮を使って

いろの濃いところ素皮 (ニスが塗ってある)

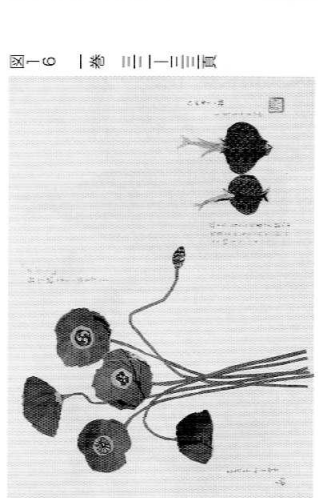
三月二十六日 写

図15 一巻 三〇三頁



一巻 三二頁 (図15左)

三月二十四日 写



一巻 三二 - 三三頁 (図16)

ひめゆりの根

桂の古くなった鹿皮の名刺入れ

内皮のきれいなところで、別に

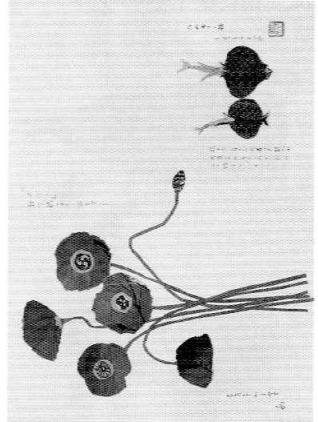
五ヶ作る 同じ日に一

『ボビ』

新聞紙のカラー版を使って

三月二十七日 写

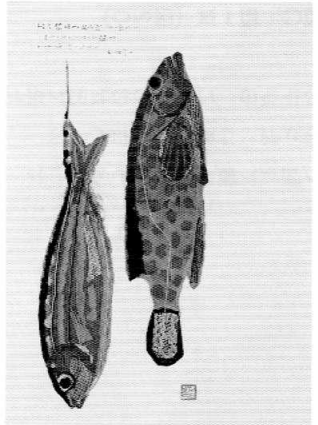
図16 一巻 三二 - 三三頁



三月二十九日 写

あ

図17 一巻 三四 - 三五頁



一巻 三四 - 三五頁 (図17)

古い作品を整理して居たら

こんなのがあったので貼る

十年前位のだから

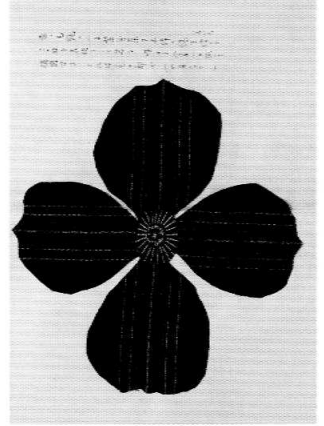
四月一日

一巻 三六-三七頁 (図一八)

赤い毛氈の上に紫花菜を木綿の縞をくいろいろ使って  
この様な表現をして見る 昨日と今日一日掛って  
構図する これは花の部分

(四頁三目)

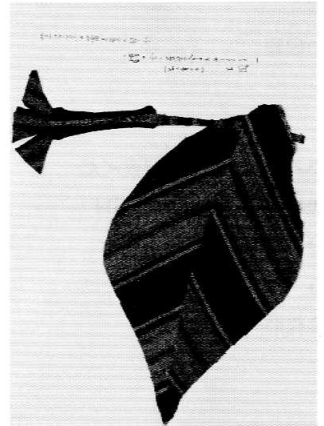
図一八 一巻 三六-三七頁



一巻 三八-三九頁 (図一九)

紫花菜の蕾と葉の部分  
(緩の会の展覧会に出品しようかと)  
(前の頁のもの) 下図

図一九 一巻 三八-三九頁

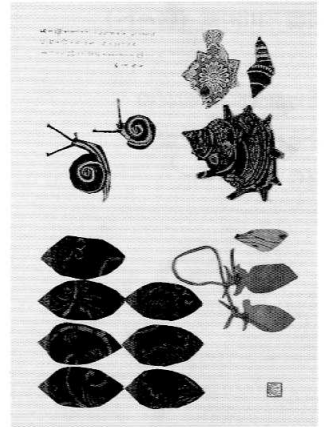


一巻 四〇-四二頁 (図二〇)

ある箱の中から こんなものが出来た  
何時か作った いろいろな古いもの  
とにかく貼って置きましょうと思つて—

四月九日

図二〇 一巻 四〇-四二頁



一巻 四二 - 四三頁 (図21)

庭の無花果の芽

ばら一輪

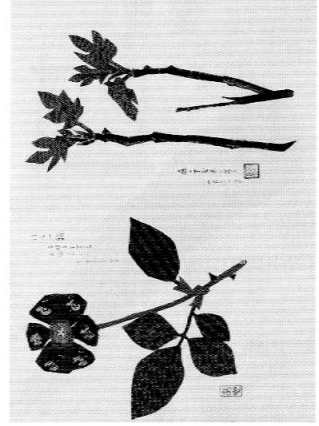
千葉子<sup>8</sup>から買った

五輪の中から

四月十一日 号

四月二十三日 号

図21 一巻 四二 - 四三頁



一巻 四四頁 (図22右)

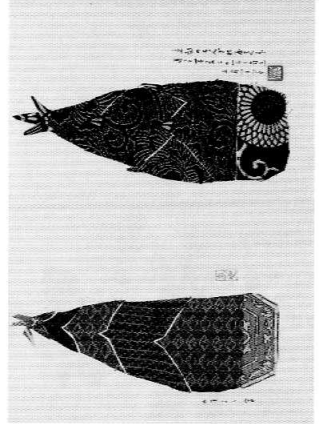
京都のちんぎれ屋さん<sup>9</sup>から  
送って買ったもの (布も箆も)

五月一日 号

一巻 四五頁 (図22左)

五月三日 号

図22 一巻 四四 - 四五頁



第一巻

中表紙

思いつくままに (二)

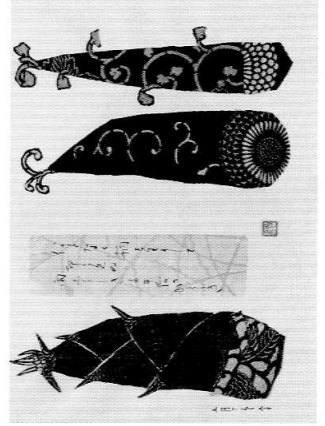
四十七年五月十三日 より

// 十二月十四日 まで

二巻 二-三頁 (図23)

何となく 柄を生かして  
切つて見ぬ  
雨ふりしきる牛后のひとこま

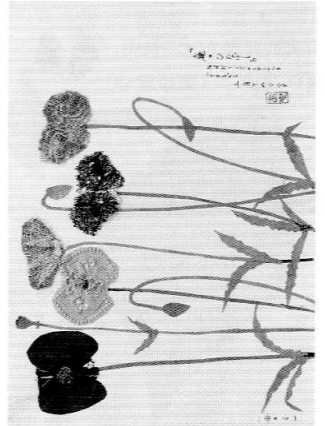
図23 二巻 二-三頁



二巻 四-五頁 (図24)

『庭のひなげし』  
NHKラジオのシャノンンを  
聞きながら

図24 二巻 四-五頁



五月十三日 号

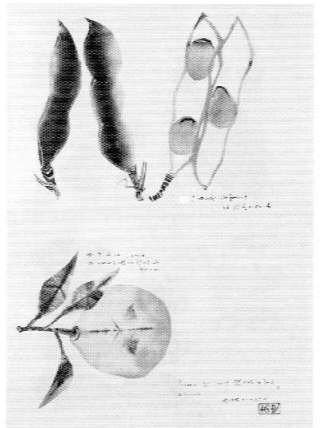
五月十四日 号

(母の日)

二巻 六-七頁 (図25)

八百屋から買った  
おたふくまめ  
半田からけいこに  
見えてる加藤美代さんから  
貰つ

図25 二巻 六-七頁



今日のけいこに使つたモデルの  
中から

二巻 八十九頁(図26)

(胎生)

『つみたなごの子』

魚屋さんからたかちゃん<sup>10</sup>が  
買って来たもの

五月のはじめ頃  
白い布に貼って終り積り  
だったが  
白い布によこれが  
ところどころあつたので  
はがして  
ここに貼る

二巻 一〇一頁(図27)

冷蔵庫の隣のビニール袋の中で  
ほそほそと生きて居た小かぶ

伊藤幸子さんが持って来て下さった  
沢山のどくだみ

二巻 一一一三頁(図28)

ここに貼るのは  
久し振りに  
展覧会前と  
展覧会后と  
いろいろと忙しかった

五月十六日

図26 二巻 八十九頁

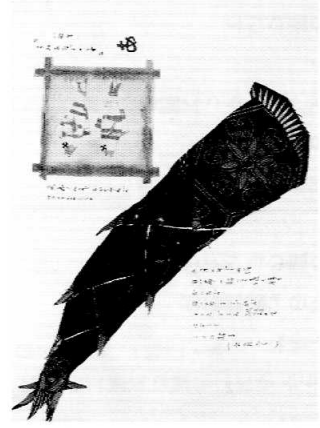
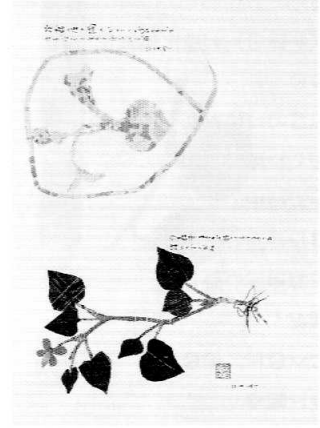


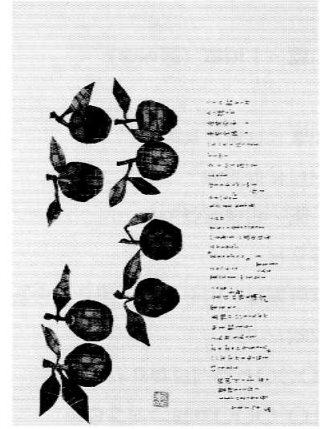
図27 二巻 一〇一頁



(六月三日)

六月四日

図28 二巻 一一一三頁



六月五日

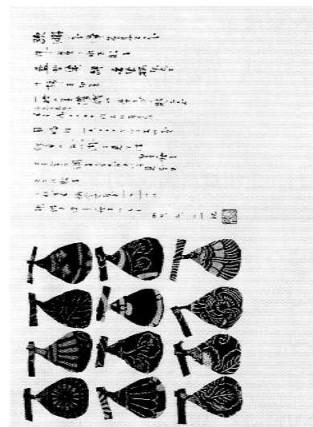
どうやら  
 身も心も落ついて  
 来たので  
 仕事を少しづつやめて居る  
 小さいものが  
 五六点出来た  
 これは  
 すもへの葉のついたのを  
 八百屋から一週間位前  
 たかちゃんが  
 『先生のモデルに』と買って来てくれた  
 スケッチして  
 買ったのをやってみる  
 この布は  
 二月頃（京都の）北野天満宮で  
 買ったもの  
 画帳にいいところだけ  
 切って貼ってある  
 これはそれこそ  
 ポロポロになったところの  
 いい所だけを切り取って  
 作って見た  
 欧州に行くので 布の  
 整理をして居る  
 その中に見つけた布

二巻 一四 - 一五頁 (図29)

欧州から帰って来てから  
 はじめてこれを貼る  
 藍型染、緋、色染柄などで  
 干柿を切って  
 一枚の美濃紙に 五十ヶづつ貼ったのが  
 しらべて見たら  
 もう九、〇〇〇ヶ以上になった  
 目的は一〇、〇〇〇ヶにしたいので

七月十八日 あ

図29 二巻 一四 - 一五頁



仕事のあい間を見ては切つて居る  
こう言う調子のものだという見本を  
ここに貼る  
これでも柄合せなど一つ一つに  
神経を使つて居るつもり

四七、九二二 記

二巻 一六・一七頁(図30)

何か風邪気味のようだ  
日向ぼっこをしなが  
仕事をする気にもならず  
そばに置いてあつた一つ袋の中をあけてみる  
〈京都の〉ちんぎれ屋さんから何時ぞや送つて来た  
澤山の端切(藍型染)が入つて居る  
こう言う袋がいくつかある  
美濃紙に貼つてとじ込んだり  
画帳に貼つたりしてして残つたものを  
(入れてある)  
同じ柄なので一  
どうやつてこれを使おうかと思ひながら  
こんなものを作つて見る

四七、一〇三頁

今年  
庭の柿の木に実が  
十五ヶみのつた その一つ  
今 柿の木には二つしか残つて居ない  
これはほんのちよつと  
繪紺のはじが  
あつたのを切る

図30 二巻 一六・一七頁



二巻 一八・一九頁(図31)

繻を使って何か作って見たくて干しあげてモデル用にどこにある  
『うみすくめ』とみかんは〈この間〉三ヶ日で買って来たもの  
それに唐辛子を添えて

十一月四日貼る  
布八ちゃんぎれ屋さんから  
送って買ったもの

二巻 二〇・二二頁(図32)

『三ヶ日のみかん』

布をいじって居ると  
何か心がなごむ  
少し位気分の悪い時でも  
布と一しよに居ると  
心さわやかになる  
布への執念のようなものが  
私のところにも体にも  
ついて終って居るようだ  
秋の空が美しい  
私の仕事場に半分位  
〈いま〉日が入って居る  
昨日から五つ目の仕事が  
出来た  
私の一番得意な時

十一月五日 午後二時二十分

『ぶぐ』

マーケットの魚屋から買って来た  
実物と同じ大きさ 〈もらったのは〉一尾だけ)

図31 二巻 一八・一九頁

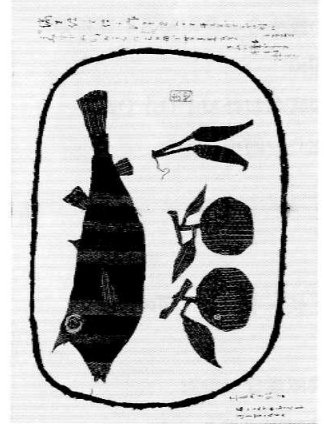
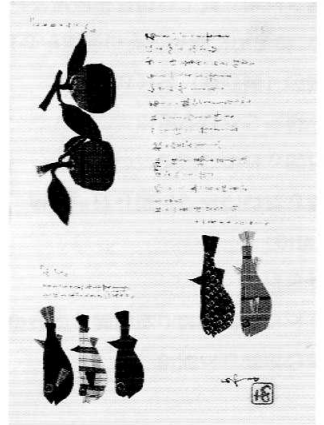


図32 二巻 二〇・二二頁



二巻 二二―二三頁 (図33)

今日と昨日仕事して刻んだはし布  
私はどんな小さな布でも  
屑籠くなかなか入れる気にならないで  
ビニール袋に入れてしまつて終つ  
ここに貼つたのを見ると美しいものばかり  
こんなものが なせ捨ててしまつてか

よろこびのおとづれ  
私は昨日 市役所へ行つて  
浅井助役に会つて来た  
というのは一週間前 ある  
パーティーで浅井助役にお目に掛り  
文化方面では話の分かる人と  
聞いて居たので、この時とばかり  
日頃思いつめて居た資料館  
がほしいとさげふ様に話した  
私の熱意にほだされてかどうか  
わからないが その後三日してから  
会いましょう と電話があつた  
雨が降つて ちょっと風邪気味  
だったが 勇んで出掛けた

私の作品集と繡、染、拵などを  
貼つた画帖と  
婦人画報(九月号) 私のことが  
割合に大きく取り上げてあるので一を  
持つて一  
きもの〈藍型染〉と羽織(繡拵)を着て、  
九時―十時の間のお約束の時間  
の間にも電話が掛つて来たり  
市長の呼び出しがあつたりして  
お忙しい中を十時二十分位まで  
話に乗つて下さり、結局  
今度出来る博物館に宮脇(口しくしん)の  
〈部屋を〉建てましよう と 財団法人に

図33 二巻 二二―二三頁



するか 私が引き受けましたと  
きつぱり言つて下さつた  
私はいそいそと帰つて来た

そうしたら 今日市の教育委員会から  
電話で博物館のことで  
相談したいので 土曜日に私宅へ  
委員の人が来て下さると 私は今おどりたい氣持。

十一月十六日

二卷 二四 - 二五頁 (図34)

先陣の木曜日の一の宮のやよい画廊<sup>1,2</sup>でのけいこの時  
美知子さんから貰つて来た『しもん』 日本名 (まるぶしゆかん<sup>3</sup>) 実物大  
十一月十八日

(五十二年四月開館の予定の  
名古屋博物館に私のためた布が  
保存されることになつた日  
市の教育館から人が見えた)

(布は垂幕の端きれ)

二卷 二六 - 二七頁 (図35)

何か心さわやかに  
庭にいで、ひなげしのまひきをする  
先日のたい風で折れた桜の木に  
鳥の音がするので  
そつとのぞいたら 二羽の愛らしいすがたが見える  
やぶつぐいすかな でも  
声がちがう様に思える  
にげてはと思つて そこを離れる  
そう言えば時々この声を聞く  
何処から来るのだらう  
どこに住んで居るのだらう

十一月十九日

図34 二卷 二四 - 二五頁

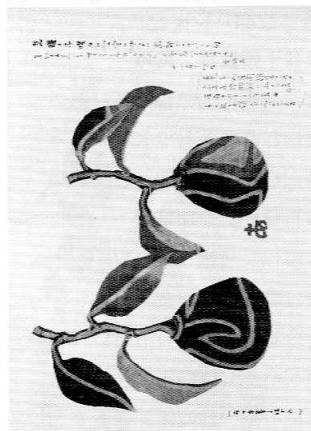
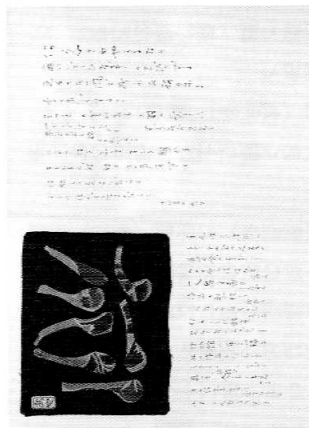


図35 二卷 二六 - 二七頁



主人は中津川へ  
 チャーナル会<sup>4</sup>の人たちの  
 展覧会があるのでー  
 たかちゃんは休みで家へ  
 一人留守番をしながら  
 作品の整理して居たら  
 こんな小さなものがあつた  
 何かここに貼つて  
 見たくなつたのでー  
 博物館に布と一緒に  
 私の作品も引取つて  
 下さるかしらなう  
 思つて、〈開館が〉今から三年先のこと  
 その頃まで生きて居るだらうか  
 ふと そんなことを思う

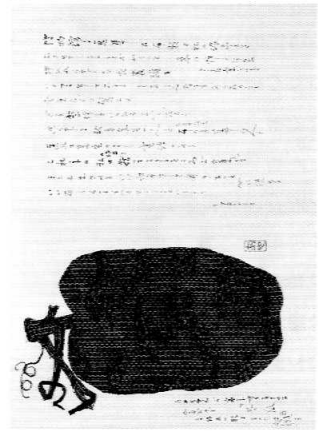
二巻 二八―二九頁(図36)

博物館に蒐集した布類と私の作品とを  
 おさめて下さることがわかつて 急に忙しくなつたよな気がする  
 押入れの中から衣袋を  
 いくつか出してみると まあこんなものもあつたのかと  
 今更ながら驚ろく  
 どう整理していつたらよいのだらう  
 近い中に教育委員の人と〈出来たら〉布のことに委しい人を  
 連れて来宅のよし 電話がある  
 これからの私の作品を蔵つて下さるところが出来たので  
 そこえ おさめるいい仕事をして行きたいと心に決める  
 いい布ももこともとさかすことにしよう

十一月二十日

たかちゃんが家から買って来た  
 『冬瓜』  
 今日だけで  
 この外五つ貼る その分は〈あとで〉縫つ

図36 二巻 二八―二九頁



二巻 三〇 - 三二頁 (図37)

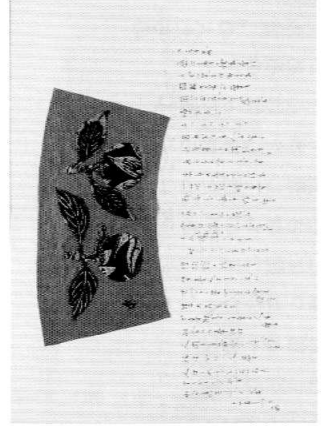
二三日前

庭に来て居た鳥は  
 うぐいすではなかつた  
 羽の色が葉と  
 同じだったのでそう思ったが  
 啼き声が  
 チツチツ チツ チツ  
 目目だと主人が言う  
 ひなげしの間引きをして  
 あぶらかすをほどこす  
 来年の五月の初め頃に  
 一花 二花と咲き出す  
 戦前から毎年作つて居る  
 家のじまんの花だ  
 今日家のけいこがあるので  
 それ(から部屋の)掃除にかかる  
 一時からけいこをはじめ  
 博物館の話をしたら  
 皆喜んで下さつたが  
 せっかく苦心してお金を使って  
 集めたものを  
 ご審附ですかと言う人も居る  
 社会への奉仕は  
 人間として最後になすべきこと  
 私は心に一人思う  
 人はこれからもいろいろと  
 言うだらうけれど  
 わが遣を行くのだ

十一月二十一日

あ

図37 二巻 三〇-三二頁

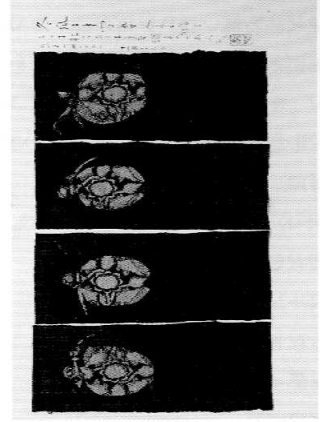


二卷 三三 - 三三頁 (図38)

冬瓜に取りつかれて今日も作る  
こゝに貼つてあるような調子の『のれん』を  
長さ一、四メートル

十一月十二日

図38 二卷 三三 - 三三頁

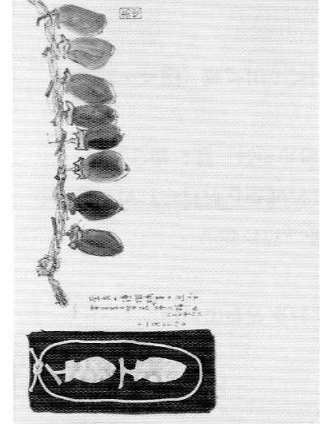


二卷 三四 - 三五頁 (図39)

奈良の浄瑠璃寺の近くで  
買って来て買った『吊し柿』 たかちゃんに

十一月十八日

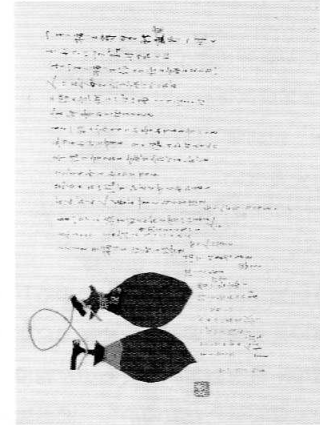
図39 二卷 三四 - 三五頁



二卷 三六 - 三七頁 (図40)

つるし柿を尋ねて新垂井<sup>1)</sup>へ行く  
うわさに聞いて行ったのに  
余りつるし柿を作つて居る家が見えない  
人にたづねて或る家に入ったが  
二階の窓側に一ぱい吊して居るのは  
全部賣れて居るとのこと  
もう一軒の家のもこれ賣れてると言うのを  
五つりわけて貰う その隣のおばあさんに  
事情を言つたら家で食べるのだがと  
ここでも少しわけて貰う

図40 二卷 三六 - 三七頁



先日のだい風でひどくやられたこと、  
 だんだん人手が無くなって皮をむくひとがなくなったこと、  
 青いまま渋を取るのだと買いに来る人が  
 来るので その方が手間もかからないしもうかるとか町の人に聞く  
 こうして干柿も何時か姿を消す時もあることを思つて  
 淋しくなる  
 昔は〈殆ど〉各家で  
 作つて居たのにと  
 リーヤカーに  
 土のついた大根を  
 一ばいに積んで居た  
 中年の女の人が  
 そう言った

十一月二十九日

二巻 三八・三九頁(図41)

『今日はあちらは 雨で寒いけな  
 昨日行ってよかったね』と夫は言う  
 青羅公園<sup>16</sup>にて拾つ  
 昨日取つて来たからす瓜

十一月三十日写生

二巻 四〇・四二頁(図42)

(昭和四十七年名古屋市に寄贈)

『壹万個乾柿型完成』

(藍型染、色型染、紺など)

木綿から麻あり

十二月二日

私が仕事を始めた頃 よく干柿を作つた  
 それは或る時木曾路を歩いて各家との軒に  
 乾してある干柿に魅せられたからである  
 それからどの位作つただらう。 百柿屏風も、

図41 二巻 三八・三九頁

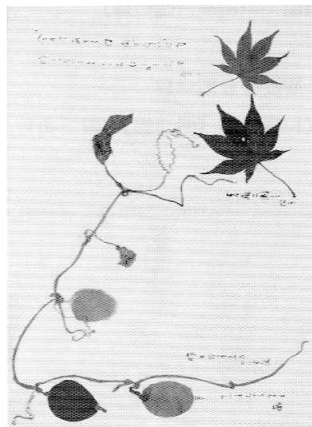
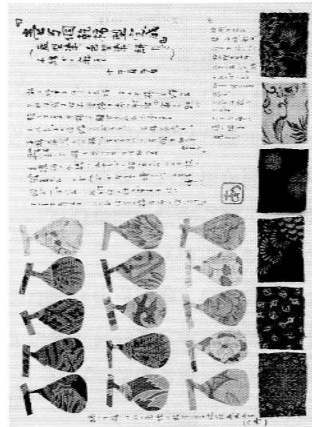


図42 二巻 四〇・四二頁



千柿屏風も二双。その中に一万個を切って見ようと  
 〈五年前〉思い立って 暇を見つけては切った  
 美濃版の和紙に五十ヶづつ貼ったのが二〇〇枚と  
 今日なったのだ のぞみがかなって嬉しい。とても嬉しい  
 胸がばいた 私は何か仕上げると 次に  
 することを考える 今度は下の様な布の使い方をして  
 歐洲で見た  
 壁、石垣、敷石  
 などと思い浮かぶ  
 整理出来ない程  
 たまったホ口を  
 かたばしから  
 切って行こうと  
 思っ。  
 こんどは数を  
 きめず  
 大きな布に  
 縫い縫って  
 見よう。

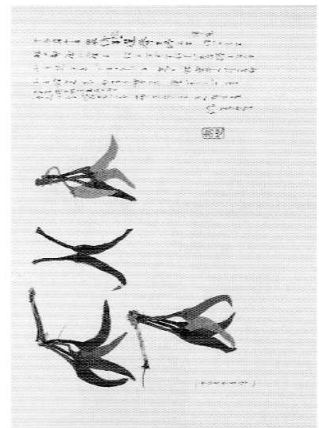
縞の千柿は外の画帖に貼ってある 現在五、九五〇ヶ(八冊)

二巻 四二-四三頁(図43)

十二月十日 衆議院の選挙を終えて帰宅 ほととして  
 私の部屋に座る 何かすがすがしい気持ちになって  
 ふと見ると ぎるの中に 先日新垂井へ行った時  
 お百姓さんからわけて貰った唐がらしがある  
 ちよつと鉄みを持って見たくなり  
 手元にある袋の中から 布を出してこんなものを作って見る

(十二月十日 写)

図43 二巻 四二-四三頁



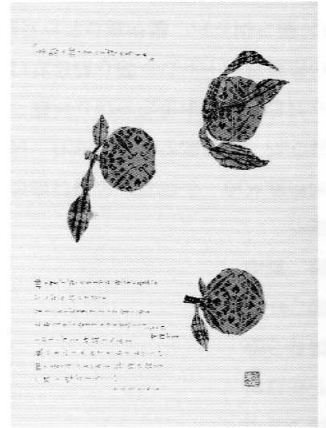
二巻 四四 - 四五頁 (図44)

『京都の柚の里にて求めたもの』

柚の里で求めてきたゆずの葉が  
だんだん枯れて行く  
生々したのだけをよつて写し取る  
お正月まで葉をつけて置こうとしたのは無理だった  
これをしぼって砂糖を入れて  
熱いおぶを入れてのもとおいしい  
柚の香りはいろいろと料理に使うと  
一段と味がよるしい

十二月十四日

図44 二巻 四四 - 四五頁



第二巻

中表紙

思いつくままに(三)

四十八年十二月二十二日 より

四十八年六月十四日 まで

この画帖紙の質が

だんだん悪くなる

十二月十九 購入

三巻 二-三頁(図45)

『冬至の南瓜』

先日新華井のお百姓さんより買って来たもの

冬至の日にはかぼちやを食べると

中風にならないというが家では

食べなかった

モデルに使いたかったから

昭和四七年十二月二十二日号

田中内閣<sup>1</sup>の成立を聞きながら

あ

三巻 四-五頁(図46)

昨日の南瓜をモデルに

布を変えて

十二月二十二日

あ

図45 三巻 二-三頁

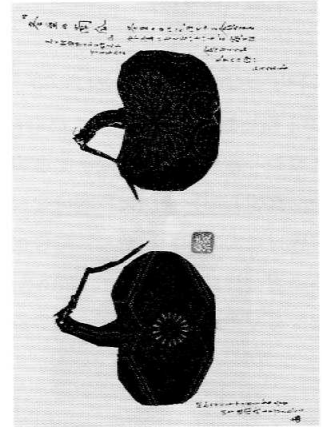


図46 三巻 四-五頁

